

国のため、人のために活躍した英才

榎本 武揚

今から一五〇年ほど前、江戸幕府に代わる新しい政治のしくみをつくろうとする動きが強まり、世の中が大きく変わった時代がありました。そんな時代に活躍した人物が、榎本武揚です。



〔国立国会図書館蔵〕

武揚は一八三六年、江戸（現在の東京）に生まれました。少年時代は、当時、最も優れた学校で学ぶなど、勉学に励みました。

青年になった武揚は、箱館（現在の函館市）で、箱館奉行所の役人として働きました。箱館は、外国に港を開いていたので、武揚は、欧米の文化にふれることができました。

その後、長崎で海軍のことを学び、オランダへ留学しました。オランダでは、最新の技術などを学び、幕府が発注した軍艦開陽丸で、一八六七年、日本に戻りました。

一八六七年、江戸幕府が倒れ、新しい政府がつくられま

した。しかし、武揚は新政府の国づくりに反対し、「将来のために平和な国を築きたい。世界と肩を並べるには蝦夷地（現在の北海道）に理想の国をつくるしかない。」と決意しました。

一八六八年八月、武揚は、総勢二千三百名余りの武士とともに蝦夷地に向けて開陽丸などで出発しました。

武揚の軍は、箱館、松前で新政府軍と戦い、五稜郭を占領しました。しかし、冬の江差で戦っている中、日本の荒波に加え、猛吹雪と強風により、開陽丸が沈没してしまいました。

一方、新政府軍は、黒田清隆を指揮官にして、箱館への攻撃を開始しました。

開陽丸を失った武揚に、新政府軍に対抗する力は残っておらず、降伏しました。武揚は五稜郭を明け渡す前日、残った兵士たちを集めて、別れのあいさつをしました。「新国家建設の理想のもとに、諸君はよく奮闘してくれた。今日までの我々の行いはむだではない。きっと日本国のために生かされるにちがいない。」言葉は涙でしめくくられました。

武揚は新政府と戦ったことを理由に牢に入れられました。

しかし、黒田らが、「武揚はこれからの日本のために欠かすことのできない人物だ。」とその才能を高く評価したので、牢から出ることができました。

黒田が北海道開拓次官に就任すると、武揚たちも開拓使の役人となりました。武揚は石炭などの資源の調査を行うなど、黒田とともに北海道の開拓に励みました。



〔現在の五稜郭（函館市観光協会蔵）〕

一八七四年、武揚はこれまでの経験や語学、専門的な知識が評価されて、特命全権公使として、ロシアと樺太・千島などの領土について話し合い、翌年、樺太・千島交換条約を結ぶなど外交でも活躍しました。

一八八五年、武揚は初代逓信大臣となり、その後も、文部大臣、外務大臣など政府の重要な役職につき、国づくりに情熱をかたむけました。

武揚の「自分の能力を生かして国や人々の役に立ちたい。」という強い思いは、私たちに大切なことを伝えていきます。

一八三六	江戸（現在の東京）で生まれる
一八五四	箱館に赴任し、蝦夷地をまわる（十八歳）
一八五七	長崎の海軍伝習所で学ぶ（二十一歳）
一八六二	オランダへ留学し、開陽丸の建造の監督をつとめる（二十六歳）
一八六八	開陽丸で蝦夷地へむかう（三十二歳）
一八六九	新政府軍に降伏する（三十三歳）
一八七二	開拓使の役人となる（三十六歳）
一八七四	特命全権公使としてロシアに行く（三十八歳）
※その後、逓信大臣、文部大臣、外務大臣をつとめる	
一九〇八	東京で死去する（七十二歳）

*箱館奉行所：江戸幕府がつくった蝦夷地を治める役所

*五稜郭：函館にある洋式の城

*黒田清隆：後の北海道開拓長官、第二代内閣総理大臣

*開拓使：北海道の開拓のために設置された役所

*特命全権公使：国を代表して外国と交渉する役目の人

*逓信大臣：郵便や通信について担当する大臣